

「撮影機廻す音ひくく伝わりぬ わが生きし日を記録する音」 清瀧章氏に聞く



— 「山形交通^{さんざん}三山線」

山形県寒河江市の羽前高松駅と西村山郡西川町の間沢駅を結んでいた山形交通の鉄道路線である。出羽三山への参詣客の輸送や鉱山への物資の運搬を目的に、1926（大正15）年に三山電気鉄道として営業を開始。1943（昭和18）年、戦時統合により三山電気鉄道は、高島鉄道（高島線）、尾花沢鉄道（尾花沢線）および山形県内陸地域の各バス会社を合併し、山形交通と社名を変更、同社の三山線となった。時代の流れと共に、相次ぐ鉱山の閉山や自動車の普及により業績が悪化し、1974（昭和49）年、全線を廃止した。

「やまがたと映画」特集では「フィルムの中のやまがた」と題し、山形交通三山線の職員だった清瀧章さんが昭和40年代に8ミリカメラで撮影した、当時の山形の風景とともに三山線の在りし日の姿を上映する。

小 学校を卒業して昭和16年の14歳の時に三山線に入社しました。昭和19年になかば強制的に海軍に志願させられ、昭和20年に入隊したんです。当時、徴兵だと休職扱いですけど、志願兵なものだからいったん会社を辞めていきました。1月に入隊しましたが8月には終戦です。戻ってきたところ、会社の以前の上司が面倒をみてくれて再入社しました。当分は「現場で働け」ということで車掌をやったりして、その後は退社するまで、本社の管理部門で仕事をしていました。最後は鉄道の担当として鉄道関係を管理していたわけです。鉄道はもう自動車に食われましてですね、赤字続きでもうやめちゃえと命令を受けまして、以来鉄道廃止事業に勤めたわけです。もう鉄道を記録することができなくなるので今のうちに撮っておこう、というのが三山線の映像を撮るきっかけでした。

もともと趣味が多くて短歌や俳句、詩や随筆を書いたりしてきました。生きていくからには証を残したいという気持ちがあります。その趣味の一環で映像を撮ることも覚え

ました。当時の鉄道関係の記録は今でも持っていますが、会社を辞めるときに「永久保存」という赤い紙を貼って倉庫に陳列したんです。ところが、私が辞めてから三十何年にもなりますから、倉庫は潰れて無くなってしまい、本社も別のところに移転してしまいました。鉄砲町の十字路にパチンコ屋がありますが、あそこに当時倉庫があったんです。前を通るたびにここに倉庫があったなあとも今でも思い出します。

『電車お嫁入り』で映っていた電車も三山線の廃止後、四国の高松琴平電気鉄道に売却されてだいぶ活躍したんですが、老朽化により解体され、現在はありません。現存するのは、西川町の月山の酒蔵資料館に保存されている103号（モハ103型）という初期の電車。あと、リナワールドには高島線の車輛があります。

足腰が弱くなってあまり出掛けられませんが、映像はいまでも撮っています。県内の8ミリ映画を趣味とする仲間同士で集まり、昭和33年頃に発足した「山形シネクラブ」（現在は「山形シネマクラブ」に改名）も約50年間続いています。会報誌の発行や（2013年9月で408号）、毎月1回ずつの例会では会員の作品の上映をおこなったりしています。（2009年より清瀧さんが会長を引き継いだ。）

デジタルカメラで撮影していますが、なかなか操作が覚えられなくてね。これから撮影したいのは、河北町に菓細工をつくる女性がおられて、その方の記録を残したいですね。

— 「撮影機廻す音ひくく伝わりぬわが生きし日を記録する音」（清瀧章）

聞き手＝奥山心一朗（本誌編集部）
2013年9月19日、山形にて収録

■上映

「フィルムの中のやまがた：清瀧章作品集」【YF】 10/11 18:30- [M2]

『冬の三山線』（1974）

『ありし日の三山線』（1974）

『雪と闘う高島線』（1974）

『さよなら三山線』（1974）

『電車お嫁入り』（1975）